蘆溝橋、一九九三

六月二五日（金）炎天、盧溝橋を目指す。

前門までバスで出て、前門から旧内城南西角に位置する長椿街までは地下鉄。そこから西へ歩いて一五分ほどで三〇九路のバス停に着く。長椿街のあたりは住宅地区の生活の臭いもなく、また商業地区の賑やかさもない、大きなビルと大きな道路や高架道路などが立ちつくす地帯。そしてコンクリートのビルや道路を炎天が静かに焼いている。人通りのほとんどない歩道を、汗をかきながら歩いていった。

三〇九路のバスは北京の西郊外の方へと走っていく。とは言ってもそのあたりは道路工事や区画整理のためだろうか、工事中の区間が多くて、バスは大きく迂回したり、でこぼこの地道をその巨体をゆすらせながら走ったりした。永定河までは二〇分ほど。うまく下車するバス停が分かるかどうか心配したのだけれども、大きな河の土手らしき風景が目に入ったので、運転手に尋ねると、そこが蘆溝橋の新橋だった。

バスを降りて、永定河の土手に立つと、ほとんど流れのない永定河の広い河原が一望できた。とても広い原っぱのような河原。右手（北）の方に、煉瓦造りの美しい橋が見え、それが別名マルコポーロ・ブリッジとも呼ばれる蘆溝橋なのだと分かる。自動車道になっている新橋からは数百メートルの距離だろうか。新橋付近の土手に腰を下ろして、まずは一服。ぼんやりと河原を眺める僕の脇を若い女女性が通っていった。僕と同じバスを降りた女性。もしかしたら同じように盧溝橋を見学に来た日本人の観光客なのかもしれない。

蘆溝橋は北京の南西郊外を流れる永定河にかかっている橋で、金代の一一八九年に建造された。が、それよりも僕らにとっては、一九三七年、日中全面戦争のきっかけとなった盧溝橋事件が起きた場所としての方がピンとくる。受験用の高校世界史ほどの知識しかない僕にとっても蘆溝橋という言葉はなにか特別の響きをもっている。もちろん蘆溝橋という場所に日中戦争やそれをさかのぼる日本の中国侵略の歴史がつくされるわけではないのはもちろんのことだけれども、僕は蘆溝橋に立ちたいと思った。そこにたたずみ、まわりの風景を見渡したい。僕にとっては断片的な歴史の知識でしかないその場所を、具体的な風景としてとらえてみるということ。

真夏日とも言える炎天の土手を、新橋から蘆溝橋の方へと歩いていった。人っこひとり見当らない、のどかな土手。土手の脇にひっそりとたたずむ煉瓦造りの家。

旧蘆溝橋は一九八七年に修築され、現在は記念公園のようになってい

て、入場は三元。石畳の橋の中央部には当時の橋の切り出した自然石を並べたような石畳が残されている。石造りの欄干には狛犬のような風情で獅子が等間隔に並んでいる。この獅子や橋には当時の日本軍の銃弾が残っているということだけれども、僕にはそれと見分けることはできない。橋の中ほどで数人の子供たちが遊んでいた。ふと見ると先程の女性が橋をこちらに歩いてくる。軽く会釈を交わして、そのままゆっくりと歩いていく。

橋を渡りきったところには、清の乾隆帝が書いたといわれる『蘆溝暁月』の白い石碑が立っていて、その脇には飾りものや記念品などの小さな二、三の露店。真昼の蘆溝橋はひっそりとしていて、観光客もなく、まるで時が止まってしまったかのようだ。

木陰でしばらく休憩したあと、再び蘆溝橋を戻っていく。蘆溝橋を渡り切ってそのままっすぐに歩いていくと二重になった城門があり、それをくぐって小さな街に入り、しばらく行くと、中国人民抗日戦争紀念館がある。外国人は入場五元（ＦＥＣ）で、荷物預けに五角。素直に外国人であるとチケット売り場の服務員に告げたのは、日本人であることがバレて、ずるい日本人の上塗りをしたくなかったからなのかもしれない。とにもかくにも戦争と侵略の歴史の前では、僕らは絶句するしかない。二重貨幣や二重価格、服務員の態度やホテルの事情や交通の不便、こういった一切の不満も歴史の前では絶句するしかない。いったん絶句し、それから語りうるのならば中国を語ること。あるいは絶句をその内に抱えながら語ること。それはそれ、これはこれとして切断して語りうるほど、僕も含めた日本は歴史に対してケリをつけてはいないという気がする。

紀念館の内部はひんやりとして静かだった。入館者は僕と、先程の若い女性だけ。展示は写真を主にしたもので、抗日運動の記録、西安事件や蘆溝橋事件、あるいは南京事件や日本軍による三光作戦の記録など。当時の写真資料をひとりたどっていると、館内の静寂もあいまって、北京や中国の騒々しい日常を離れたなにか特別な空間に足を踏み入れているような気がする。それは日本人としての僕にとってはある種のいたたまれなさを感じさせる空間でもあるのだけれども、一方ではまたある種の『聖』あるいはリアルを感じさせる空間でもある。それは僕にとっては血の通った記憶ではないけれども、今現在の僕らを僕らたらしめているある種のコアのようなものだ。普段は日常の中に埋没して忘れられている歴史のコアあるいは歴史のリアルに触れるような感覚。そして歴史のリアリティーを目前にした絶句の感覚とその絶句において日常が浄化されるような感覚。もちろん日本による中国侵略の歴史を、その加害性を抜きにして、あるいは今なお生々しく生き続けている記憶を無視して、中性的な『聖』

として語るには、日本政府や日本人の努力は不足しているとも言えるし、半世紀の時間は短いとも言えるのだけれども。

ひとり漠然とした物思いとともに展示物をまわっていると、中国人の観光団体がやって来た。北京観光の一環として訪れた団体だろうか。賑やかな笑い声を交わしながら、彼らはドガドカと紀念館に足を踏み入れ、ガヤガヤと言葉を発し、一陣の嵐のように去っていった。あぜんとして立ちつくし、去っていく彼らのあとを見送ったのだった。

風化は両岸からやって来る。記憶から生身の感情や身体性が欠け落ちていくのは不可避なのだ。半世紀も前の、しかも自らが生まれる前の出来事を自らのものとして記憶していることはできない。しかし関係ないと言うのはひとつの選択にすぎない。関係あると言うことも、おそらくまた選択であるように。

ひと通り紀念館をまわって、そこをあとにしようとするとき、すでに日本人の女性はいなかった。軽い挨拶を交わしただけだけれども、人気のない蘆溝橋と紀念館をめぐる同じ日本人という感じがあったので、ふと僕は寂しさを感じた。ひとり紀念館の荷物預けからバッグを受け出し、さっき通り抜けた城門をくぐり、永定河に沿って新橋の方へと歩いていった。

晴天の昼下がり。野原のように荒れた河床に修築されたばかりの蘆溝橋は美しく風景を横切っていた。静かな蘆溝橋の風景に、頭上から白い日射が照りつけていた。Tシャツに汗をにじませながら、僕は人気のない土手道を歩く。

「額縁入りの歴史」とふと僕は思う。

歴史のリアリティーはしっかりと額縁に入れられ、すでにある種の枠組みに収められている。僕らは歴史を学び、歴史を受け止めようとするが、ふと振り返ると歴史をはぐれ、歴史のリアリティーから見離されている自らを発見するのだ。歴史は僕らにとってある種の『聖』だけれども、僕らを歴史から演繹することはできない。現在は決して過去の結果として語りつくすことはできないのだ。むしろ現在というのは歴史に対するある種の忘却であるとさえ言える。日常や現在というのは常に忘却を抱え、忘却になだれ落ちていくものだ。それはまた何事かの未知へと足を踏み入れていくということでもある。だからこそ歴史を額縁に入れることにもまた大きな意味と意図とがあるのだと言える。だが僕らは額縁を離れて帰っていかなければならない。現在という不思議でとらえどころのない場所へと。なぜならそこそこが僕らが今生きている場所だから。

僕は体験ということを思う。体験という血のつながりを途切れたところから歴史を受け止めるということ。言い替えれば、歴史を今現在において受け止めるということ。それは客観的に歴史というものを評価すると

いうこととは違う。僕が僕であるというそのことを絶えずつむぎだしつつある今この現在という場所において歴史を受け止めるということだ。もしも体験ということが至上であるのならば、いくらそれに耳を傾けても僕らには決して到達することはできない。非体験者にとって体験というのは彼岸なのだ。歴史に対して謙虚であること、歴史に対してごうまんにならないこと、そのことは大切なことだけれども、それは歴史に対して頭をたれることとは違う。歴史を学ぶことは必要なことだ。だがそれは決して十分なことではない。問題は現在という場所に露出する歴史を見ること、耳を傾け、それに触れることだ。事実としてあるがままにある歴史ではなく、現在という場所に露出する歴史。真実の体験はどこにあるか？それは現在という場所でのみ産出されるのだ。記憶はどこにあるか？歴史は？それは現在という場所でのみ産出され、体験され、反芻されるのだ。

六月末の北京郊外の午後の強い日差しに焼かれながら、僕はバス停であえいでいた。市街地への帰りのバスはなかなか来ない。ただ標識がポツンと立っているだけのバス停の付近に腰を下ろして、果物のビン詰めの容器を利用した水筒のお茶をゴクリと飲んだ。ビンにふたをしてナップにしまい、煙草を一服。目の前の乾いた風景を砂埃を上げながら、ときおり車が走リ抜けていった。

ようやくやって来たバスに乗って終点まで。そこから歩いて長椿街（地下鉄）へ。日差しは街の歩道やコンクリートの高架道路を焼き、持って出たお茶も飲み干してしまって、僕はあえぎながら道を歩いた。ようやくの思いで地下鉄の駅までたどり着き、そのまま前門へ。とても喉が乾いていたので何か飲物でも飲みたかったのだけれども、ぐっとがまんをして前門から路線バスに乗って、王府井（ワンフーチン）へ。というのもそこにはドミトリーの同室者たちに噂の王府井マクドナルドがあるのだ！

王府井は天安門前から東に向かう東長安街という大通りから北に延びる通りで、北京の銀座とも言われる大繁華街なのだ。その王府井のいちばん南の入口にマクドナルドはあり、ドミトリーの日本人のひとりなどは朝ホテルを出てはまずマクドナルドでコーヒーを飲みながら一服し、王府井あたりの繁華街をぶらつき、再びマクドナルドで昼食をし、というような北京生活をエンジョイしているのだった。

王府井のバス停で降り、ひっきりなしに乗用車や黄色いタクシーや二両連結のバスなどが行き交う長安街の歩道に立ったとき、僕はふとまどってしまった。どうやってこの広い車道を渡ったらいいのか分からないのだ。しかし同じように下車した人たちを見ていて、すぐに気づく。地

下道があるのだ。（北京の街には広いメインストリートを横断する地下道が多い。）

地下道を出て、王府井の入口に向かうと、急に繁華街の賑わいたつような華やぎが漂ってくる。道路の両側には、歩道沿いに並木が植樹され、建ち並ぶ建物には様々な色合いの看板や広告がほどこされ、通りに華やかな彩りをそえている。買い物や観光で訪れた中国人たち、あるいは外国人の旅行者たちの少し浮き立ったような雰囲気も街には漂い、その繁華街特有の気分に僕はたちまち感染する。王府井マクドナルドは街の入口にあり、そのファミリ ―レストラン風の外観ですぐにそれと分かったのだけれども、方針を変更してまずは街をぶらついてみることにした。

歩道を行き交う人々にまじって浮き立つような気分で歩いていると、広場のようになった百貨大楼前には飲物やアイスなどの露店。王府井の露店はさすがにこぎれいで、街の雰囲気にもマッチしたような感じだ。飲物の露店では売り台に氷の塊が乗せられていて、その上でジュースのビンを転がして冷している。並べられたジュースのビンの形に氷は溶けて、その窪みでジュースは転がりながら冷える。とても喉が乾いていたのを思い出し、ジュースを買って露店の脇の木陰で飲んだ。

煙草が切れていたので、目についた商場に入っていった。日本の百貨店の地下食品売り場を思わせる食品の商場には、買物客がいっぱいで賑わいを見せていた。煙草の売り場で紅梅を買い、それから小袋入りのネスカフェインスタント。

いくつかの商場や百貨大楼をまわって、お土産物を物色した。セットになった宮廷風のお菓子や干した果物など、日本に持って帰ってもおそらくはそんなにおいしいものではないとは思われたけれども、まあ話のタネくらいにはなるかな、と思う。

外国語（主として英語）の書籍を扱う外文書店に入り、ぐるっとひとまわり。外国人観光客の姿が多い。外文書店の二階にはカセットテープの売り場があり、お土産に音楽テープを買うことにする。二胡、簫、楊琴などのテープ（一本二〇元程度）。演奏者の名前を見ても見当がつかないので、題名を見て、適当に決める。服務員に言って、陳列ケースからテープを出してもらう。買うという意思表示をすると、服務員は伝票を切ってくれる。伝票を支払いのカウンターへ持っていき、代金を支払う、というまだるっこしい方式。

王府井入口近くのカメラ・メガネの店でフィルムのプリントを頼む。一本が約二九元。前門の写真屋の値段よりも十元以上も高い。それだけ出来上がりの品質が良いということなのだろうか。中国では現像液か何かを使いまわしするから安いけれども出来は良くないのだ、と聞いたことが

あるから、もしかしたら王府井のカメラ屋さんの値段が妥当で、良心的にやっているということなのかもしれない。

招待所の部屋は、いつのまにか日本人の数人だけになってしまった。外国人の若者たちは次々と旅立ち、ドミトリーの部屋はがらがら。残った日本人は、これから中国の奥へと向かうというひとりをのぞいて、ほぼ中国旅行を終えたという者たちだ。ここ北京でしばらく休息し、そして日本へと帰っていく。このまま僕の旅も平穏に収束していきつつあるのかもしれない、と僕はふと感じる。明日もう一日北京に滞在し、明後日は天津。その次の日には天津の塘沽から船で神戸へと向かう。

招待所近くの食堂で夕食をとったあと、今後のことをラサで同宿になりここ北京で再会した男に尋ねてみた。彼は僕と同じ船で神戸に帰る予定なのだけれども、三日後の朝、天津を経て直接塘沽へと向かうつもりだ、と言う。天津には安宿がない、と言うのだ。ガイドブックに紹介されている宿はどれも外国人を泊めてくれない。最後の一日を天津でホテル捜しに苦労するよりも、北京でもう一日ゆっくりとして直接港まで行った方が正解だ、と言う。

僕は少し気分が重くなる。北京にあと二日もいるのも気が進まないし、かと言って天津で苦労するのも…。それに天津からこの中国に入国した別の若者の話も気がかりだった。彼が到着したのは夜遅くでおまけに雨も降っていたのだという。安宿はどこにもなくて、さんざん苦労したあげくに船員相手の高いホテルに泊まったのだ。彼らの話を聞いたところでは、天津も塘沽もなにかとても悪意に満ちた土地のように思われて、僕はふとこのままあと二日北京にいて、平穏な旅の終わりを迎えようかなと思った。そうすれば港に向かうのも二人連れになり、ずいぶんと心強いし…。

しかし！と僕は思う。ホテル捜しで苦労することを厭うのならばそもそも中国に来ることもなかったわけだし、むしろそれを求めて来たのではなかったか。安らぎや休息を求めて、旅をしようと思ったわけではない。つねに行くためにこそ、中国に来た。そう。行くこと、できうるかぎり、つねに行くこと、とりあえずでも行ってみること。

行こう、と僕は思う。